Title	キャンパスにおける礼拝、その充実 : チャペルを中心とした大学共同体形成を目指して
Author(s)	相澤, 一
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume22,2007.3 : 106-115
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3609
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

キャンパスにおける礼拝、その充実

――チャペルを中心にした大学共同体形成を目指して――

相澤　一

このたび、「キャンパスにおける礼拝、その充実――チャペルを中心にした大学共同体形成を目指して」というテーマで発題をさせていただくことになりましたが、率直に言って、これは、一昨年にチャペルが完成して以来の神学的宿題である、という感じがします。といいますのは、聖学院大学にチャペルが存在し、そこで礼拝が持たれている、それが大学全体にとってどのような意味があり、また位置を持つのか、ということを、説得力を持った仕方で提示するのがチャプレンの責務ではあると感じつつ、しかし問題の難しさのゆえに今まで放置してきたからです。

古代エジプトや中国のように、行き過ぎた宗教儀式の重視が結局は国そのものを傾け最終的には滅ぼした事例もありますが、しかし聖学院の場合、「礼拝栄えて大学滅ぶ」とか「チャペル栄えてキャンパス滅ぶ」とかいう風にはならないでしょう。しかし、礼拝の時間と講義の時間、チャペルと教室は別物、という考えはあると思います。それに対して、そうではないということを、説得力を持った仕方で語るというのは、率直に言って、非常にやっかいな課題です。しかし今回この発題を任されまして、これも神学用語で言う「強いられた恩寵」かもしれない、とも思うのです。そういうわけで、至らない点もあろうかと思われますが、どうぞ最後までお付き合いいただければと

思います。

ところで、聖学院について話す前にローマ・カトリックを一瞥いたしますと、ハンス・ゼーデルマイヤの『大聖堂の生成』によると、中世の教会堂は「ヨハネの黙示録」に記されている天のエルサレムの幻を原像（Urbild）とした模像（Abbild）であり、その建築は模像芸術（abbildende Kunst）あるいは再現芸術（representational art）であったそうですが、話を現代に移しましても、『新教会法典』第一二一四条には、教会堂は「信者が神への礼拝を公に行うために使うことを主要目的として建てた聖なる建造物である」と規定されています。要するに、カトリックにおいては教会堂の重要さは自明のことであり、それに対して基本的には異議が唱えられることはないわけです。

それに対してプロテスタントの場合はどうか、と言いますと、マルティン・ルターは「教会の建物を拒否はしなかったが、彼が安息日を聖なる時間としては高く評価しなかったのと同じく、それらを聖なる空間としては高く評価しなかった」そうです。ですから、プロテスタントにとって教会堂の存在は自明とは言えません。さらに問題を難しくするのは、プロテスタントの聖書主義です。試しに聖書を開いてみますと、「しかし神は、はたして地上に住まわれるでしょうか。見よ、天も、いと高き天もあなたをいれることはできません。ましてわたしの建てたこの宮はなおさらです」（列王記上八・二七）、「あなた方が、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまことをもって父を礼拝する時が来る。神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまことをもって礼拝すべきである」（ヨハネ四・二一～二四）といった聖句に我々は出くわしますが、これらは、どれもチャペル不用論へと導く可能性がありまです。また、ピューリタンによる教会の規定である、*congregatio fidelium* も、教会堂の神学的位置付けを提供するものではありません。

なぜこんな話をするのかと言いますと、実は、プロテスタントには教会論とか礼拝論というのはかなりあるので

すが、教会堂論とかチャペル論というのは、ほとんどまったく存在しません。例えば、聖学院でよく名の知られた神学者であるカール・バルトやラインホールド・ニーバーは、教会堂についてはまったく議論しておりません。しかし、ありがたいことに、プロテスタント神学者の中でもパウル・ティリッヒは、例外的にプロテスタント教会建築論をかなりの紙数を割いて論じていますので、我々はそこから重要な示唆を得ることが出来ます。そこで、以下は、彼の議論を参考にチャペルの神学的考察について考えてみたいと思います。

ティリッヒは、文化の神学の提唱者として名を知られていますが、彼の文化の神学は、非常に多岐に亘るものです。しかし特にチャペル論と関係が深いのは、彼の芸術の神学です。彼は、芸術の神学の可能性についてこう語っています、「もし神学が、すべての存在を通しての神的なものの発現についての言説を意味するならば、それは可能である」。この言葉は、宗教が全ての根底に存する「深み」の次元、彼の用語で言えば究極的なるものに関わるものであるということを前提とするものですが、その「深みの次元」が芸術作品を通して表れ出る、あるいは鑑賞者によって直観されるところに芸術の神学の可能性が存する、というわけです。それは、あらゆる芸術作品を、究極的なものの表現という視点から見る見方であり、さらに、チャペルの神学的解釈の可能性もそこに存することになります。

その視点から建築を見る場合、確かに建築も芸術の一つではありますが、彼は、建築は「道具であると同時に芸術作品」である、と言います。それは、建築は「実用的な目的を持つ」ということですが、それが、建築において擬古的伝統主義を抑制し、また「建築術が空想的な思いつきにふけることから建築を守ってくれる」と言います。以下は彼の言葉の引用です。「私は近代の教会堂や建物一般におけるゴシックとロマネスクの様式の模倣の不誠実を見た」。「不当にも伝統と呼ばれる回想と、不当にも聖別と呼ばれる叙情味と、不当にも聖なる形状と呼ばれるアラ

ベスク」。これらを見る限り、いわゆる「伝統」と呼ばれるものに対する敵意が彼にはあることがうかがえるのですが、彼によると、そうしたものを回避するのが、建築家の誠実です。それは「特定の状況の客観的な要求を満たして、重要な何事かを表現しようと欲する建築家の創造的霊感」に従うことであり、それが守られるところ、常に伝統への固着から解放された新しいものへの試行錯誤がなされ、その中から新たなる教会建築が試みられていく、ということを彼は創造的可能性見ているようです。

このことも突き詰めていけば非常に面白いテーマではあるのですが、時間も限られておりますので、先ほど触れました根本的な問題、つまり、果たして教会堂は本当に必要なのか？　という問いに対して彼が何と答えているのかを見てみたいと思います。プロテスタント教会は、聖書重視、説教重視、簡単に言えば「言葉」重視という性格を持っておりますので、元々教会堂を含めた視覚芸術をあまり重視して来なかった、とは一応言えるでしょう。そうした歴史的背景、また聖書の言葉などを踏まえてティリッヒが語るのは、教会堂は究極的には必要ない、ということです。ヨハネの黙示録にあります通り、天のエルサレムには神殿はありません（二一・二二）。しかし、それは「地上の町ではない」のです。この地上に宗教が、そしてチャペルが存在するのは「創造的根拠からの人類の悲劇的で普遍的な離反と呼ぼうとしているもの（＝罪）に対する証拠」です。それゆえ教会堂は、この世の只中にあって「啓示的経験が、聖なるものの諸経験が、その中に納められる……宝物函」となります。「聖なる場所と聖なる時間と聖なる行為は、我々の究極的なるものとの、我々の存在の根拠との関係を断ち切って聖なるものの経験を日常生活の塵で覆う傾向にある世俗的なものに対するカウンターバランスとして必要なのである」。

ここに書かれている言葉は、非常に鋭い洞察であると思います。確かにルターは「毎日が聖日である」と言いましたが、それは、日曜日という他の六日間とは区別された聖日がきちんと存在しているからこそ言えることであり、

神の国ならぬこの世の国にあっては、他とは区別された聖なる時間と空間は絶対に必要だ、というわけです。

ただしそれは、チャペルを世俗から隔絶された、世俗とは無関係の場所にする、というわけではありません。むしろ「言葉と行為によって、チャペル自体とそれらの宝物を［世俗に対して］開く」ことがチャペルの課題となります。「人々が世俗的生活の真っ只中において聖なるものを黙想できるとそこで感じるような聖化の場所を創造するのが、教会建築家の課題である」。「それ自体を彼らの世俗的生活へと開いて、究極的なもののシンボルを通して我々の日常的経験の有限な表現へと放射する」、「聖なるものの現臨……それにおいて経験されるところのものを世界へと開く」。

ここまでの話を整理しますと、第一に、あらゆる芸術作品は、万物の根底、万物の深みの次元、ティリッヒの用語を用いて言うなら「存在の根底」がそれを通してあるいは表れ、あるいは鑑賞されるべきものであり、教会建築もその例外ではありません（ただしその際、すでに現代人に対して深みの次元を伝達する力を失ったものを、伝統的であるというだけで遵守するのは不誠実である、とされます）。

第二に、視覚芸術を軽視するプロテスタントにおいて、チャペルの必要性を神学的に語ることが出来るのか、ということについては、この世がこの世であり神の国ではない限り、世俗とは一応区別された聖なる空間は必要です。しかし、それは隔絶ではなく、チャペルにおいて感じ取られた「深みの次元」「存在の根底」「究極的なるもの」が、本来はチャペルの外においても感じ取られねばならないものである、という仕方で、外に向かって開かれた宝物函としてチャペルは存在する、ということです。

さて、チャペルをそのようなものとするために、ティリッヒはいくつかの実際的な提言をしています。しかし、その詳細について語ることはここでは出来ませんので、いくつか興味深いものだけを紹介したいと思います。

一つは、「聖なる空虚」（sacred emptiness）という概念です。「聖なるものの経験は、それが有限なものすべてを超越しているがゆえに、決して直接的に可能でないものであるから、それの現臨は真正の現示（representation）と象徴的表現とによって媒介されなければならない」。ここでティリッヒは真正の representation と媒介を通しての representation との二種類を考えているようですが、真正の representation として彼が考えるのが、「聖なる空虚」です。それは、「超越的な『神』の現臨の力強いシンボル」、「建物のヌウメン的な性格が顕わになるような方法で空虚な空間を建築が形作る時にのみ可能となるもの」、「霊感による空虚」、「空虚な空間がどのような形式においても表現出来ないものの現臨で満たされていると我々がそこで感じるような空虚」などと言われ、そこには独特の「聖性の美」、「空虚の美」が存する、とも言われます。恐らくこれは、ハイデッガーの研究者が言うところの「何も語らないための言葉」という概念に対応するものと考えるのが最も適切でしょう。つまり、聖なるものによって満たされるために敢えて空けられた空間、聖なるものによって満たされるために空けたままとっておかれた空間、ということです。我々のチャペルには「キリストの椅子」がありますが、これは興味深い「聖なる空虚」の応用例と言えるかもしれません。聖なるものによってしか満たされない空席が敢えて設けてある、というのは、実にティリッヒ的であり、ティリッヒ研究者としてはまことに愉快なことです。

しかし、聖学院のチャペルも含めて多くのチャペルはがらんどうであるわけでなく、例えば十字架のような伝統的なシンボルが置いてあるのですが、ティリッヒはそれらについて否定はしませんが、しかしこう言っています、「理解するのに博識な解釈を必要とするようなシンボルは、純正のシンボルの力を持っていない」。この点からすると、我々はリタージカルカラーの導入などについては慎重になるべきでしょう。また彼は、「聖なる対象物が、有限なものの世界にある他の事物と並んで実在する対象物であるという印象は避けねばならない」とも言っています。

これは、チャペルおよびその内装のデーモン化や偶像崇拝化の拒絶ということでしょうが、しかしそうなると、今度は、何が真のチャペルにふさわしいシンボルであるのか、その区別の基準は何か、という問題が起こって来ます。

実はこれについてもティリッヒは非常に興味深いことを語っています。彼によると、深みの次元すなわちあらゆる存在の無制約的な実質と制約的な形式との統一としての宗教と文化（そこにはチャペルも含まれます）との統一は「神律」です。それは、単なる恣意のような内発性でもなく、また外部からの圧力のような外発性でもなく、両者の統一であるような、あらゆる存在がその根底にある神的なものにより律せられた状態ですが、しかし「完全な神律は完全な神の国である。つまり、それは象徴であって実在ではない」と彼は言います。それはつまり、チャペル建築という芸術作業を含めたすべての文化は神律という観点から見れば不完全である、ということであり、「それは待つこと、『まだない』ということ、上から破られるということの素質を、すべての文化的創造性の中に持ち来るものである」と彼は言います。それは、教会は「古物収集家」（antiquarian）になってはならず、創造の可能性に挑戦しなければならない、ということです。

こうして、彼は議論をこう締め括ります、「信仰の行為と同様、聖なる場所の建設もまた一つの冒険である」、「教会建築の表現は、引っ込まれてしまい、我々が再び待たなければならない、隠れた『神』が帰って来られることを『待つこと』であるべきだ」。

以上がティリッヒのチャペル論のあらましですが、ここでどうしても追加したい文章があります。それは、聖書学者として名高い渡辺善太の教会建築論です。彼は、説教「信仰と象徴――会堂の象徴的意義」の中でこう述べています、「神殿、または教会は、［教会堂の］外で聞いた［神の］声の確認の場所だ。そこに会堂、礼拝というものの値打ちがある」。「私はそこ［会堂］で、聖書を読んで教えられたことを……確認する」。つまり、説教はもちろん、

どのような教会建築であろうと、そこには聖書の「御言葉」との一致がなければならない、ということです。ティリッヒの「深みの次元」「究極的なもの」というだけでは、どうも漠然としていて、必要以上に他宗教に開かれてしまう危険性もありますので、この渡辺善太の言葉は、チャペルのキリスト教性の規定として極めて有益な、プラクティカルな性格付けであると言えるでしょう。

さて、以上のような議論を踏まえて、我々はいかにしてチャペルを中心にした大学共同体形成を目指して、キャンパスにおける礼拝を充実させて行くことが出来るのか、という、この懇談会のトピックを考えるのですが、第一に我々は、チャペルにおける全学礼拝という時間／空間は、本来すべての時間／空間がそうであるべき時間／空間である、ということを確認するべきでしょう。それは、礼拝の時間には、他の講義の時間に語られることとは無関係なことが語られている、というのではなく、万物に行き渡り、万物の根底に存する「深みの次元」に「ついて」の、また深みの次元「から」の言葉が語られているのだ、ということです。別の言葉で言えば、いろいろな講義では潜在的に語られていることが礼拝では顕在的に語られている、ということです。ただし、チャペルの礼拝である以上キリスト教的なことが語られるわけですが、恐らく我々は、キリスト教的な真理の普遍包括的な真理性、ヴィンデルバントの言葉を借りれば「包越」（包括しつつ超越する）に対する信頼のようなものを持つべきなのでしょう。もちろんこれは、いかにもティリッヒ的な予定調和的楽観主義である、という批判を受けるかもしれないということを意識して言っているのですが、この問題も深入りすると長くなりますので立ち入らないでおきます。

ともあれ、全学礼拝は講義と無関係なことが語られる時間ではなく、潜在的にではあるがすべての講義を豊かにするものである、どういう題材を扱う講義であれ、それに対して「深みの次元」を提供するものである、と捕らえるなら、我々は、全学礼拝によって大学全体がキリスト教という枠をはめられて制限されるのではなく、むしろ豊

かになると言えるでしょう。聖学院大学はユニバーシティですが、全学礼拝というのは、ユニバーシティのユニティ・一致が、万物の深みの次元に関わる事柄を語る、という仕方で確立される場所だと言えるのではないでしょうか。このことは、大学とは真理探究の場所であり、およそ真理と呼ばれるものはキリスト教のメッセージ、すなわち万物の深みの次元に関わるメッセージと無縁ではない、ということを前提としています。それは無知に由来する傲慢であり楽観主義である、と批判されるかもしれません。しかし「チャペルを中心にした大学共同体形成を目指して、キャンパスにおける礼拝を充実させて行く」というのなら、大学の様々な学問的営みはチャペルにおいてなされる全学礼拝と無縁ではない、ということを語らなければならないのであり、そのためには、今言ったようなこと、チャペルおよび全学礼拝においては顕在的であることがその外では潜在的である、潜在と顕在の違いはあれどその間には一致、ユニティがある、という理解はなかなかよいのではないかと思うのです。もし、大学における様々な学問が、相互に何の関係もない、というのなら、それはユニバーシティではなくマルチバーシティである、ということになるでしょう。

肯定的に言えば、それは、全学礼拝で語ってくださる先生方は、自分の専門分野に邁進する生の只中で聞き取った神の言葉を、自信を持って語ってくださってよいのだ、ということです。しかしそれは、否定的に言えば、チャペルの運営に責任を持つ者たちに対して、強靭な洞察力、つまり、伝統遵守という誘惑に打ち勝ちつつ、一見キリスト教や礼拝とは無縁と思えるものの中になお神の言葉を聞き、それを肯定する、という、非常に難しいことを強いることになります。しかし、それもまた「強いられた恩寵」かもしれません。ともあれ我々は、礼拝で語られる真理が大学で教えられている諸学問の真理と無縁でないこと、そして、そのことを洞察するためには、そして、そのことを分かってもらえるためには、他の学問に対して謙虚に教えを請い、そしてその中に神の言葉を洞察しよう

とする絶えざる努力が必要であろう、ということを指摘して、この発題を終えたいと思います。ご清聴感謝いたします。

（二〇〇六年二月二三日、全学礼拝懇談会）